山陽新聞を読んで

川崎医療福祉大講師　直島克樹

子ども追い込む価値の強制

こどもの日である5月5日付朝刊社説では、子どもの権利条約の理念に沿って子どもを育む必要性が訴えられていた。子どもは一人の人格ある存在で、さまざまな権利を行使する主体である。権利に対して義務を問う人たちがいるが、子どもであることこそ権利が生じる第一の根拠であり、社会には子どもの権利を守る責任がある。

しかし、例えば子どもや若年層の自殺の多さ（3月22日付朝刊、24日付朝刊社説）、子どもシェルターの運営困難（3月24日付朝刊）、保育所問題（3月17日付朝刊、4月24日付朝刊）などは、子どもたちの権利が侵害され、望ましい社会ではないことを示している。山陽新聞においては、継続した問題提起を期待している。

さて、上記も含め、子どもの貧困や虐待などは権利問題であるが、支援を困難にしている一つが、自立にまつわる自己責任論であると考えている。何かに支えられることは避けるべきだ、甘えであるといった声を聞くのは珍しくなく、自己責任に支配された価値観が広く浸透していると感じざるをえない。

それは社会的に成功している人や比較的学歴がある人たちから聞くことが多いとも感じている。自分はこれだけ苦労したが努力して乗り越えてきたのだから、あなたも乗り越える努力をすべきだと考え、そうしない人を批判ないし排除する傾向がある。努力が必要ないなどと言いたいわけではない。ただ、努力をするにはそれなりの基盤が求められるのであり、そのことへの理解が求められる。誰にも頼らず頑張らなければならないという強制される努力が、逆に子どもたちを追い詰め、孤立や心身状態を壊していくことに結びつく場合があると知らなければならないだろう。

人には生きてきた歴史があり、培われてきた価値観がある。しかし、その価値は絶対的ではなく、自分が良かったからといって人に対して良いとは限らない。自覚なく無意識に価値を押し付けてしまうと、排除の溝を深めてしまうこともあると考えている。これは困難を抱えた子どもたちをさらに追い込んでしまうことにもなる。

子どもの困難においては、社会の構造と機能に加え、私たちが前提としている価値観が問題の背景としてあると考えなければならない。価値や文化の問題としても考えるとき、単に政治的な側面だけでなく、自分自身、そして地域そのものの問題であるという視野が開けるのではないだろうか。山陽新聞では、貧困などの福祉的問題がいかに価値的な側面を孕（はら）むのか、海外での事例も含めて、子どもにとって望ましい社会への視野を広げていく報道を期待したい。

「山陽新聞を読んで」は月2回、日曜日に掲載します。